

所属集団において大学生が抱えている課題の分類

— 正課外活動に着目して —

○津賀伊織¹・野中陽一朗²

(¹高知大学教育学部・²高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門)

問題と目的

サークルや部活は、自らの選択で所属、活動可能な集団であるため、正課内活動で形成される集団と異なり、独自の課題を持つものと考えられる。

集団での意思決定の方法においては、多数決を用いない話し合い(上田, 2014)や課題志向的、成員志向的リーダー・シップ(飛田, 1994)の有効性が示されてきた。また、実験場면을対象とした研究では、集団条件が個人条件より後悔をあまり感じないこと(藤田・城, 2015)や集団討議での満足度の高低に共通してポジティブな「自己認知の変化」が出現すること(上田, 2014)が明らかにされてきた。しかし、これらは、一時的に集団を構成した実験場面による研究であるため、既存集団の中で意思決定を必要とするような現実場面において生起する課題については検討されていない。

そこで、本研究では、前段として既存集団であるサークルや部活の中で大学生が抱えている課題を採取及び分類し、大学生が所属集団でどのような課題を抱えているのかを探索的に検討する。

方 法

調査参加者 中国四国地方に所在地を置く2大学所属の大学生334名(男性184名, 女性150名)。

調査手続き 調査は、各大学の講義中に集団形式で質問紙を配付し、調査の内容に協力の同意を得た者に対して調査を実施した。質問紙の構成は、以下のとおりであった。なお、その他の尺度も含められていたが、本稿では、本研究の目的に合致する項目のみを記載した。

正課外活動での所属 サークルあるいは部活に所属しているかどうかの有無を尋ねた(2件法)。

所属集団での課題 所属集団で実際に生じた集団での課題あるいは問題についてできるだけ具体的な事例の記述を求めた(自由記述)。

結果と考察

分析対象者 サークルあるいは部活に所属していると回答した者(183名: 54.8%)から所属集団での課題に対する回答に不備の見られた者(17名)を除いた総計166名(男性99名, 女性67名)を本稿における分析対象者とした。

所属集団での課題の抽出 所属集団での課題として回答されたものの中から、同一の文言で記載されたものは同一のものと整理した結果、148種類の課題を抽出した。

所属集団での課題の分類 14名の評定者(男性7名, 女性7名)に対して、148種類の課題を呈示し、サークルあるいは部活の中で生じる課題や問題として似ているものの類似性に基づき課題を分類することを依頼した。評定者が課題を類似性に基づき分類したのから非類似度を算出し、非類似度行列である距離行列に対してクラスター分析(Ward法)を行った(Cophenetic' $r = .63$)。

その結果、解釈可能性から7クラスター解を採用した。第1クラスターには、新入部員の入部や人数不足といった20種類の課題が含まれていたため、「人員欠如」と命名した。第2クラスターには、人間関係の悪化や言いたいことを言えない雰囲気があるといった28種類の課題が含まれていたため、「人間関係不和」と命名した。第3クラスターには、積極性に欠けるや全員が参加しないといった28種類の課題が含まれていたため、「活動内容充実」と命名した。第4クラスターには、優勝できない、全国大会出場といった21種類の課題が含まれていたため、「目標達成志向」と命名した。第5クラスターには、楽器が足りないや車がないといった15種類の課題が含まれていたため、「活動環境・備品」と命名した。第6クラスターには、情報の伝達ができなかった、連絡事項の伝達が不十分といった7種類の課題が含まれていたため、「情報未伝達」と命名した。第7クラスターには、運営の根幹的な考え方や人数が多すぎるといった29種類の課題が含まれていたため、「内部運営」と命名した。

本研究より見出された7つのクラスターからは、大学生が所属集団において、集団の存続や維持に関係するものや事務的な課題により生じるもの、また集団の実績や結束力を向上させるために生じるものなど多面的な枠組みに基づき課題を抱えていることが示唆された。今後は、各課題の解決過程について検討していくことも必要となる。